

初期仏教における修善と省察

香 月 拓

(2017年12月27日受理)

The Benevolence and Reflection in Early Buddhism

Taku KATSUKI

要旨：本稿は、「初期仏教における修善と省察」をテーマとして、パーリ語文献や阿含經典を読み解いたものである。釈尊在世時、世俗に生きる者としての孝敬、優婆塞・優婆夷としての三宝への帰依・五戒・十善、比丘・比丘尼としての戒・定・慧などの善行が見られた。しかし、このような善行に努めた者にしか輪廻からの解脱が叶わなかったということだけでなく、悪行を為した者にも解脱に至る道が開かれていた。そこで重要なのが省察である。悪行を為した者にとっては、省察こそが解脱に至る第一歩であった。もちろん、善行に努め励んでいる者にとっても省察は重要な実践であった。これは現代における「努力」と「振り返り」という二つの関係性と同様であるといえよう。さらに、省察が「自己を内観し確立する」という仏教の本来性に至るために必要な出あいについて考察を試みる。

Key words：初期仏教 修善 省察 内観 善知識

1. はじめに

仏教の目的はさとりを得ることである。換言するならば、輪廻からの解脱を目指すものである。釈尊在世時、輪廻からの解脱を目指し、出家をして比丘・比丘尼となる者が多数いた。もちろん、出家した者が全員解脱したというわけではなく、また、出家せずとも優婆塞・優婆夷という在家の立場で阿羅漢果に到達した後解脱した者も少なからず存在する。釈尊は、在家・出家に関して仏教本来の立場を「比丘たちよ、私は在家者でも出家者でも正しい実践を称賛する (dvinnāhaṃ bhikkhave sammāpaṭipattim vaṇṇemi gihissa vā pabbajitassa vā.)¹⁾」と述べている。これは比丘に対して説いたものであるが、同様のことをバラモン階級の青年スバに対しても説いている²⁾。藤田(1964)は、『相応部』の同箇所を見て、正しい実践とは八聖道の実践を指すことから、その完成は解脱にほかならないとしている³⁾。ただし、正しい実践をすることが解脱への道であるとはいえ、世俗のしがらみの中で生きる在家信者が実践することは非常に難しいといえる。それ

では、正しい実践をする者にしか解脱への道は開けないのであろうか。本稿では、パーリ語文献や阿含經典をもとに、初期仏教でどのような修善が説かれていたのか、そして、悪行を犯した者が自身を省察することで解脱に至ることがあったのかを見ていくこととする。

2. 初期仏教における修善

はじめに述べたように、釈尊は在家者でも出家者でも正しい実践を称賛された。藤田[1964]が正しい実践とは八正道のことであると述べるように、「道の中で八聖道が最上であり、真理の中で四つの法が[最上]である (maggān'aṭṭhaṅgiko seṭṭho, saccānaṃ caturo padā)⁴⁾」と説かれている。八正道とは「正見・正思惟・正語・正業・正命・正精進・正念・正定」というさとりに至る八つの実践として知られるものである。

また、「摘み集められた花から多くの花輪が作られるように、死ぬ[運命で]生まれた人間は、多くの善を行うべきである (yathāpi puppharāsīmha,

kariyā mālāguṇe bahū. Evaṃ jātena maccena, kattabbaṃ kusalaṃ bahum.)⁵⁾」と説かれるように、釈尊は在家者や出家者の実践すべき善行や守るべき戒めについて様々に説かれている。例えばDhpAでDhp.30偈の因縁譚⁶⁾を見ると、マガという青年が七つの戒めを守りながら日々の生活を過ごしていたことが称賛されている。七つの戒めとは以下のものである。

- ①生きている限り両親を養う
- ②生きている限り先輩を尊敬する
- ③生きている限り優しい言葉で語る
- ④生きている限り両舌しない
- ⑤生きている限り物惜しみをせず施しをする
- ⑥生きている限り真実を語る
- ⑦生きている限り腹を立てず、怒りが生じた時は速やかに抑制する

また、『長阿含経』では、実践すべき善である修善について十三項目が挙げられている⁷⁾。不殺、不盗、不淫、不妄語、不両舌、不惡口、不綺語、不慳貪、不嫉妬、不邪見の十善に加えて、布施、父母への孝養、師長への敬事である。十善については、十の行いを全て反対の意味にしたものを十不善、或いは十悪⁸⁾と言うように、断悪修善が仏道を歩む者の基本であったことは間違いないであろう。また、在家信者になるためには、この十三項目の修善に加えて、仏・法・僧の三宝に帰依し、五戒（不殺、不盗、不淫、不欺、不飲酒）を守ることであると説かれる⁹⁾。ここで説かれている行為は集団生活や社会生活をするうえで非常に大切な道徳的行為とも言える。

しかし、釈尊は「不善、あるいは自分自身に不利益となる行為は容易である。しかし、善、あるいは利益となる行為は最高に成し難い (sukarāni asādhūni attano ahitāni ca, yaṃ ve hitanca sādhunca taṃ ve paramadukkaraṃ.)¹⁰⁾」とも説かれている。どれほど大切なことであっても、常々実践していくとなると非常に成し難いことだといえる。

3. 悪行を為した者の省察

それでは、道徳的な行為から外れた者はさとりには到達することが叶わないのかといえ、そうでもな

いようである。初期の仏教経典や註釈書の中には、善行を為す者ばかりが出てくるわけではなく、悪行を為した者が阿羅漢果に到達したという記述もいくつか見られる。つまり、修善よりも重要なことが記されているのではないかと考えられる。本章ではDhp.100偈及びDhp.173偈の因縁譚から、悪行を為した者がどのように省察するに至り、解脱への道が開かれていくのかを読み解いていく。

「Dhp.100偈の因縁譚¹¹⁾」

タンバダーティカという盗賊の死刑執行者について説かれたものである。タンバダーティカは55年もの間、盗賊の死刑執行をすることで生活していたが、高齢になり仕事を解雇されてしまった。その日、タンバダーティカは托鉢中のサーリプッタ長老を見て、初めて清らかな心が起こり、サーリプッタに礼拝をして優婆塞となった。彼は穏やかな心でサーリプッタの説法を聞きながら、この迷いの世界から預流道に随順する信が生じた。優婆塞は家に戻るとき、牝牛に胸を打たれて殺されたが、死後、兜率天に生まれた。このことを知った比丘たちは、なぜあれほど残忍な盗賊殺しが天に生まれ変わるのかと疑い、釈尊に尋ねた。釈尊は「偉大な善知識が得られたことによって、彼はサーリプッタの法の説示を聞いて随順する智慧が生じた」と答え、続けてこの偈を説かれた。

sahassaṃ api ce vācā anattapadasaṃhitā,

ekaṃ atthapadaṃ seyyo yaṃ sutvā upasammati.

たとえ千の無益な言葉があろうとも

聞いて〔心が〕静まる一つの利益ある言葉〔の方〕がより勝れている。

「Dhp.173偈の因縁譚¹²⁾」

アングリマーラ長老について説かれたものである。容姿端麗で秀才であるアヒンサカ（後のアングリマーラ）はコーサラ国王の司祭バラモンの子として生まれた。やがてタッカシラーに留学したアヒンサカは師匠に可愛がられたが、これに嫉妬した一部の学生たちは、師匠が彼を憎むように仕向けた。そ

のため師匠は、アヒンサカに「修行の完成は千人の右手の指を集めてくることである」と教えを示した。彼は修行の完成のために次々と人を殺し、その指で華鬘を作ったため、アングリマーラ（指鬘）と呼ばれた。そして1000人目となった時、釈尊に出あったが、どのようにしても釈尊に近づくことはできなかった。アングリマーラが釈尊に「止まれ」と言ったところ、釈尊は「私は止まっている。生きとし生けるものに対して命を奪うことをすでに止めている。止まっていないのはお前だ」と言われた。この言葉により、アングリマーラは自分の罪を懺悔し、釈尊のもとで出家した。やがて、アングリマーラ長老は阿羅漢果を得て、般涅槃したのである。比丘たちは、あれだけの人を殺した者が般涅槃したことを疑問に思い、釈尊に尋ねた。釈尊は「確かにアングリマーラはこの世において多くの人を殺した。しかし、後に善知識という縁を得て、怠ることなく修行に精進しました。それゆえ、彼の悪業は善によって包まれたのです」と答え、続けてこの偈を説かれた。

yassa pāpaṃ kataṃ kammaṃ, kusaleṇa pithiyati.
so imaṃ lokaṃ pabhāseti, abbhā muttova candimā.
かつて犯した悪業は、善業によって包まれる。

彼は雲から離れた月のように、世間を輝かす。

この二人の物語に共通していることは、善知識との出遇いである。善知識とは「教えを説いて、仏道に入らしめる人。人に生まれてきたことの真の意味を教えてくれる人」である。タンバダーティカはサーリプッタに出遇うことで自身の行いを省察する清らかな心が起こり、アングリマーラは釈尊に出遇うことで自分の罪を懺悔するという省察に至ったのである。善知識に出遇うことで初めて自身の行いを振り返る省察の心が起こり、内観の自覚が芽生えてくるのである¹³⁾。悪行を為した者にとっては、省察こそが仏道に入り解脱に至る第一歩であったといえよう。

4. おわりに

釈尊在世時より、輪廻からの解脱を目指す者にとって、断悪修善を生活の基本として生きることが解脱に至る道となっていたことは間違いないであろう。ただし、釈尊が「他人の間違いに目を向けるな。他人がしたこと、しなかったことに目を向けるな。ただ、自分がやったこと、やらなかったことだけを見つめよ。(na paresaṃ vilomāni, na paresaṃ katākatāṃ. attanova avekkheyya, katāni akatāni ca.)¹⁴⁾」と省察について説かれるように、努力や修善すらも、傲慢の因としてしまうのが我々人間であるといえよう。また、いつでも修善を徹底して生きていくということは限りなく不可能であるからこそ、悪行を犯した者でも解脱に至る道が閉ざされることなく、省察について説かれていたのである。これらの点において、省察の意味するところは大きいと考えられる。これは現代でも大切なことである。現代では様々な場所において「振り返り」が求められる。これも「振り返り」のない努力に向上は見られないとの考えによるものであろう。それと同様に、修善のみで生きることができない我々においては、そこから省察することで育ちにつながるのである。

さらに、釈尊は所謂「自灯明・法灯明」として次のように説いている。

この世で自らを洲とし、自らを拠り所として、他人を拠り所とせず、法を洲とし、法を拠り所として、他のものを拠り所とせずにあれ。……ここに比丘は、身体について身体を観察し、熱心によく気を付けて、念じていて、世間における貪欲と憂いとを除くべきである。……感受について感受を観察し……心について心を観察し……諸々の法について諸々の法を観察し、熱心によく気を付けて、念じていて、世間における貪欲と憂いとを除くべきである¹⁵⁾。

このことから、自身を内観し拠り所とできるような自己を確立することにこそ仏教の本来性があるといえよう。ただし、内観は自分の側から起こるものではない。そのため、本稿で見てきたように、真に仏法に生きた釈尊や仏弟子、いわゆる善知識との出遇いこそが重要であると考えられる¹⁶⁾。その出遇い

を通して仏智に触れるのである。断悪修善に精進することなく、自分の都合にとらわれて生きる自身を省察することで、そのような自身こそが苦しみの因であったと照らされて懺悔する身となる。そして仏智によって初めて我に執われた自身を内観した時、仏智を讃仰し苦悩を引き受け、真に仏道を歩む者となるのであろう。

<略号>

PTS : The Pāli Text Society

DN : Dīgha-nikāya

MN : Majjhima-nikāya

AN : Aṅguttara-nikāya

Dhp : Dhammapada

DhpA : Dhammapada-Attakathā

<参考文献>

- 赤沼智善 (1997)『原始仏教の研究』赤沼智善著作選集刊行会
 片山一良 (2009)『『ダンマパダ』全詩解説 仏祖に学ぶひとすじの道』大蔵出版
 北島泰観 (2000)『一こころの清流を求めてー パーリ語仏典『ダンマパダ』ウ・ヴィッジャヤーナンダ大長老監修 中山書房仏書林中村元[1992]『原始仏教の成立』春秋社
 斎藤昭俊 (2010)『仏教教育選集1 慈悲の教育』国書刊行会
 佐々木閑 (1999)『出家とはなにか』大蔵出版
 中村元 (1992)『中村元選集第12巻 ゴータマ・ブッダⅡ』春秋社
 中村久子 (1987)『こころの手足』春秋社
 平川彰 (2000)『平川彰著作集第11巻 原始仏教の教団組織Ⅰ』春秋社
 平川彰 (1999,2000)『平川彰著作集第9、10巻 律蔵の研究ⅠⅡ』春秋社

- 藤田宏達 (1964)『在家阿羅漢論』『結城教授頌寿記念：仏教思想史論集』pp.51-74
 藤田宏達 (1979)『原始仏教における業思想』(『業思想研究』99-144頁) 平楽寺書店
 森章司編 (1993)『戒律の世界』溪水社
 森章司 (2000)『初期仏教教団の運営理念と実際』国書刊行会

<脚注>

- 1) PTS, AN, vol. I, p.69
- 2) PTS, MN, vol. II, p.197
- 3) 藤田 [1964] p.64
- 4) PTS, Dhp.273
- 5) PTS, Dhp.53
- 6) PTS, DhpA, vol. I, p.263-p.281
- 7)『国訳一切経』阿含部七、128-129頁
- 8) 殺生、窃盗、邪淫、妄語、両舌、悪口、綺語、貪欲、瞋恚、邪見。
- 9)『国訳一切経』阿含部七、33頁。
- 10) PTS,Dhp.163
- 11) PTS, DhpA, vol. II, p.203-p.209
- 12) PTS, DhpA, vol.Ⅲ, p.169-p.170, theragāthā「アングリマラ長老物語」参考。
- 13) 省察と内観の関係については今後も議論の余地があろうが、ここでは自身の言動を省みて、その善し悪しを考えることを「省察」とし、内省によって心の内に真理を観察し、自己そのものを見つめることを「内観」とする。
- 14) PTS, Dhp.50
- 15) PTS, DN, vol. II, p.100
- 16) ただし、善知識とは必ずしも人であるとは限らない。中村久子氏は、「たくさんの善知識の方によって教え導いて頂いたお蔭でここまで連れて来て頂きましたが、ほんとうの善知識は、先生たちではなく、それは私の体、『手足が無いことが善知識』だったのです。悩みを、苦しみを、悲しみを宿業を通してお念仏させて、喜びに感謝にかえさせて頂くことが、先生たちを通して聞かせて頂いた正法」と述懐している。(『こころの手足』[1987] p.192)